

タイガを行く

シベリア大自然ルポ

< 1 >

シベリア。ウスリー地方には広大な原生の森・タイガが広がる。

豊かな森と川、動物や印象的な人々。最深部のビキン川を訪ねた。

五月下旬に訪れたハバロフスクの空は、あちこちで頻発している山火の煙で視界が悪い。ハバロフスク郊外からタイガの奥に至る

広がる雄大な風景 ビキン川へ

まで、何度も山火事跡に出くわした。

私たちの目的地は、ハバロフスク南方に位置するビキン川上流の、少数のハンターだけが住む辺境の地である。車で約三百キロ離れたクラスニーヤール

まで走り、さらに小型複葉機で飛ぶ。

ビキン川は大河アムールの支流ウスリー川そのまた支流に当たるが、長さは五百六十キロと信濃川の三百六十七キロをはるかにしのぐ。標高千数百メートルのシホテアリニ山脈から



流れ出し、流域はほとんどが手つかずの広大な森林に覆われている。

小型複葉機アントノフIIの小さな窓からの

視界は良くないが、眼下に雄大に広がる原生林と、その間を自由に蛇行するビキン川が見えた。この環境なら確かにウスリートラヤ、巨大魚アムールイトウがすむはずだ。

× ×

「雪国自然学校」を主宰するナチュラリスト、新潟市在住の井上信夫さんがシベリアのタイガを歩いた。八回にわたって写真と文で「最深部報告」をする。



アントノフ機から見た、タイガを貫くビキン川

タイガに行く

シベリア大自然ルポ

< 2 >

用トラック。ここからこの村には数人の猟師
二キロほどの林間のぬのほかに気象観測施設
かるみの道を爆走すの職員家族が住んでい
る。枝をなぎ払い、荷る。
台の私たちを振り落と

さんばかりの勢いだ。さっそくウロンガ川
猟師のセルゲイの建で毛針を振る。美しい
物ハリスやレノックとハリウスやレノックと
りにある。母屋のほかの数年ぶりの再会に感
にゲストハウス、バー

雪国自然学校

井上 信夫

ニヤ（ロシア蒸し風

呂）、食堂用の棟まで
備えた立派なものだ。

村に降り立った。迎えは巨大なタイヤ
をはいた四輪駆動の軍

は、森や川の様子が見
て取れる。五十分後、
私たちはタイガのまっ
ただ中のウロンガ狩猟

日本からの同行者
は、いずれも新潟県内
在住の四人の友人たち
である。クラスニーヤ
ールから乗ったアント
ノフⅡは旧ソ連や周辺

各国で、空のタクシー
がわりに
使われて
いる小型
複葉機で
ある。砂

利のグラ
ンドでも
草原でも
手軽に離
着陸でき
る。

四十年

から五十
年もたっ

た老朽機
で不安だ

が、乗っ
てしまえ

ば覚悟を
決めるし

かない。
百―二百

級の低空
で飛ぶか

密林の中の別世界

狩猟村



アントノフ機の前の一団（右端が筆者）

タイガを行く

シベリア大自然ルポ

< 3 >

た米が春に流れ下ると
じった。
野鳥の種類も実に豊
富だ。わが国では希少
なクマガウは普通に生
息し、オジロワシやシ
ノリガモ、カワアイサ、
ミコアイサなどのカモ
類も目撃した。途中の
ホル川下流では、コウ
ノトリが飛んでいた。
雪国自然学校
井上 信夫

セルゲイのキャンプも未なのに、ここは新
からウロンガ川を二キ 緑の真っ最中である。
ほど下ると、ビキン本 川岸には所々に樹木
流の合流点である。三 が山のように積み重な
艘の木造ボートに分乗 っている。厳寒期に厚
してビキン川を二十キ さ三十一五十キに達し
ほどのさか
のぼった。

樹木は 実に多種
多様だ。
直径一
を越すド
ロノキや
キハダ、
ハルニレ
などの広
葉樹が茂
る。斜面
の濃い緑
はトウヒ
やチョウ
センゴヨ
ウなどの
針葉樹、
山火事跡
はシラカ
バやヤマ
ナラシの
明るい緑
だ。五月

息づく豊かな動植物

ビキンの流れ



ビキン川をボートでさかのぼる

タイガを行く

シベリア大自然ルポ

< 4 >

ビキン川下流には多数のコイ科魚類やナマズ、カムルチー（ライギョ）、カワカマスなどが生息しているが、

上流の狩猟村付近では魚種はほとんどなくなり、サケ科五種とアブラハヤ類、カシカ類、シベリアヤツメ、フクドシヨウなど十二種を

確認したにすぎない。サケ科の五種はすべてわが国には分布しない種類である。産卵期が春なのは、全面結氷するシベリアの厳しい河川環境に適応したためであろうか。

これらの清流にすむ魚たちは生臭みがなく、いずれも美味である。焼き魚や塩汁、ムニエル、てんぷらなど、現地調達のすばらしい食材となった。

雪国自然学校

井上 信夫

美しいサケ科の魚 清流の魚たち

最大は一・五斤に達するタイメン（アムールイトウ）である。同行の鈴木さんは全長九六センチのタイメンを釣り上げたが、まだかわい



③



④

③まだ若いタイメン ④2種のレノック



①



②

①最も一般的なハリウス ②上流タイプのハリウス

タイガに行く

シベリア大自然ルポ

< 5 >

ビキンの川岸には至る所に青草を食みにやってくるアカシカやヘラシカ、ノロなどの足跡が残されていた。これをねらって捕食獣もやってくる。

トラの足跡はアカシカが頻繁に通るけもの

道にあった。長さ十一

五歩もあるヒグマの足跡もあった。渡辺さんはボートの上から、巨大なヒグマが森に逃げ込むのを目撃した。

ビキンの川岸には数

百ばかりもわたって岩がごろごろした斜面が続く場所がある。ここは小型のウサギの仲間、ナキウサギの生息地だ。耳を澄ますとキチツ、キチツという独特の鳴き声が川まで聞こえてくる。姿は見えないが、岩の間に直径三、四ミリの丸いふんを見つけた。トナカイゴケの上にあったオオヤマネコのふんには、ジャコウシカの毛が含まれていた。

ジャコウシカは体重一〇キロちょっとしかない特殊なシカだ。雌雄とも角はなく、雄の犬歯は長さ数センチもある。雄の腹部にある麝香は、漢方薬や香料の原料になるため乱獲が続いた。現在はワシントン条約で取引が規制されているが、ロシアではまだ捕獲が認められている。

雪国自然学校

井上 信夫

動物たち

希少な動物の宝庫



若いトラの足跡



ナキウサギがすむ岩場

タイガを行く

シベリア大自然ルポ

< 6 >

ウクライナ生まれのサーシャは、モスクワの毛皮専門学校を卒業後、この村に来て二十年以上たつ。冬は動物を狩り、夏はミツバチを飼育し、畑を耕す。

まだ水が残る井戸の水は三度汗だくののどにしみ通るが、冷たすぎて少しずつ飲む。ゲストハウ

スには、十六枚のジャコウシカの毛皮がベツドわきの壁を飾っていた。

冬は狩り、夏は耕作 辺境の生活

予想外だったのは図書室である。中の一冊には、半世紀前の蒲原平野の足踏みの水車みずぐるまやハンコタン姿の女性、イサザの四つ手網漁も載っていた。

この村に三十五年住

む最長老のアレクセイは工夫の人である。空き缶をつなげた煙突の作り方や薫製小屋、獲物を載せて引っ張るソ

リなどを見せてくれた。干し草と旧日本軍のパラシュート？で覆った氷室には、ガチガチの固い氷があった。

かつてこの地方は清の領土で、ウロンガという川の名前も、もともと中国名だという。現在この村にはウスリ

の先住民、ウデヘの人々は一、二人しかいない。サーシャの畑から出土した石器や土器片は、相当古い時代から人々が住み着いていたことをうかがわせる。

雪国自然学校

井上 信夫



村の長老アレクセイの話聞く

タイガを行く

シベリア大自然ルポ

<7>

狩猟村の対岸の見晴らしのいい尾根に十字架をかたどった慰霊塔があった。七十数年前に処刑された百人の分離派

を訪れた。モラルが低下してしまった人々に生き方を説き、一生懸命働いて自らの実践で示すのだという。川が

凍結したらさらに奥地に入り、洞窟で暮らしながら教会を建てる計画だ。気負いの見える若いモンクの思いが、果たして人々に伝わるのだろうか。サーシャの家で旧日本軍のアリサカという数挺の赤錆びた銃身を見せられた。百年以上

前の明治三十年、有坂陸軍大佐が開発した三〇年式歩兵銃である。これらの銃は日露戦争に用いられたもののようである。この美しい辺境の地にも重い過去の歴史があった。

雪国自然学校

井上 信夫

過去にも重い境界

歴史の戦い

ある分離派教徒はピョートル大帝の西欧化政策を拒んでこの辺境の地に隠れ住んだ。しかし、スターリン時代の革命政権にも従わなかったために粛清されたのだという。

狩猟村を去る前日、この二月に狩猟村に移り住んだモンク（ロシア聖教の僧侶）の小屋



分離派教徒の慰霊塔

タイガに行く

シベリア大自然ルポ

< 8 >

シベリアのハンター
の主な現金収入源は、
セーブルとも呼ばれる
クロテンの毛皮であ
る。かつてコート一着
一千万円、襟巻きが八
十万円の時
代があっ
た。だが、
動物愛護運
動の高まり
によって日
本や欧米で
は需要が減
り、価格は
一気に半分
から三分の
一になっ
た。

料として密猟されてい
るといふ。動物愛護が
希少動物の絶滅につな
がる皮肉な現実があ
る。

日本は世界一の野生

動植物輸入大国であ
る。かつて年間五ト、
十八万頭分もの麝香を
輸入して批判を受けた
が、今でも数キロから十
数キロが輸入されている
という。

シベリアには日本で
は失われてしまった原
生自然が残る。何者にも
阻まれることなく流
れる大河、川岸から

山々まで続くうっそう
とした大森林、コウノ
トリなどが飛び交いカ
ワウソが魚を追う水
辺。ここでは日本の原
風景に出合うことがで
きる。

雪国自然学校

井上 信夫

残る原風景 希少動物に厳しい現実

いきおい
金になる動
物がねらわ
れる。ワシ
ントン条約
で取引が規
制されてい
るシヤコウ
シカは猟師
一人当たり
年間百頭前後捕獲さ
れ、商取引が厳禁のウ
スリートラさえ毎年五
十頭前後が漢方薬の原



優れた毛皮をもつクロテン (アントノフ氏撮影)